

## 論文

# 東方キリスト教から見た戦争\* ——アントニイ・フラポヴィツキイの第一次大戦観——

近藤喜重郎\*\*

## はじめに

キリスト教と戦争の係わりについて、前者が後者の原因を為しているという論調がある<sup>(1)</sup>。キリスト教文化圏に属する国々が多く戦争に着手してきたのは事実であり、その例は、11世紀から13世紀まで繰り返され、その後も「異端者」に対して派遣された十字軍<sup>(2)</sup>、16世紀から17世紀まで歐州でいわゆる宗教改革<sup>(3)</sup>をめぐって繰り返された戦争<sup>(4)</sup>、16世紀から始められ20世紀まで続いた南北アメリカとアジアへの侵略、そして20世紀に行われた二度の世界戦争と冷戦及び湾岸戦争、21世紀に始まったテロに対する戦争など、枚挙に暇がない。その一方で、この種のキリスト教批判はキリスト教や『聖書』の記述そのものに対する理解不足が原因だとする反論がある。すなわち、キリスト教の聖典である『聖書』には、旧約律法の要である十戒の中に「殺してはならない」の戒めがあり、新約のキリストの言葉には「剣を取った者は剣で滅びる」「敵を愛せ」などの教えがあるから、キリスト教は戦争を認めていないと主張する人々もいる。

上の議論は、20世紀に戦争が地域紛争のレベルから文明間の衝突のレベルへと拡大したことからも、その重大さが理解できる。ただ、それが一辺の事実に基づいているという点も無視できない。すなわち、キリスト教は、ヨーロッパやアメリカで成立した宗教ではないのである。生まれは、地中海世界の東端またはアジアの西端に位置するイスラエルであり、その基礎は地中海東部のギリシア語文化圏で固められた。すなわち、キリスト教の聖典である『聖書』然り、その教義であるキリスト両性論や三一論（三位一体論）然り、修道制と世俗社会との両立・循環といった組織論然り、キリスト教の基本的な内容は皆、地中海世界東部で整えられたのである。こうして基礎を据えられたキリスト教は、20世紀にかけて世界を席巻するに至ったのである。

\* 本稿は、2012年9月15日に福岡女学院大学において開催された第63回キリスト教史学会大会における口頭発表が基礎となっている。

\*\* 東海大学外国語教育センター第二類

ト教は、今に至るまで成立した地域であるギリシア及び地中海世界東部で継承されており、そのキリスト教を現在、ギリシア正教、または広く東方キリスト教という。

上の事実に光を当てるなら、自然、もう一つの事実が浮かび上がってくる。すなわち、「アジアの一端で生まれた」<sup>(5)</sup>キリスト教はまもなく、地中海世界全体に広がりを見せ、11世紀までにラテン語文化圏でローマ・カトリック、さらに16世紀までに西欧でプロテstantとという新たな型のキリスト教を生み出したのであり、これらラテン語文化圏を経由して変容・形成されたキリスト教を広く西方キリスト教というのである。つまり、アメリカはむろんのこと、ドイツ、フランス、イギリスといった、現在日本でキリスト教国の代表のようにして知られる国々は、『聖書』正典の成立にも、キリスト教の成立にもまったく関わっておらず、その後、1000年以上の時代を経て、独自の「改革」を繰り返しているに過ぎない。それゆえ、仮に西欧諸国や米国といった、キリスト教文化圏の一部が戦争に繰り返し着手したとしても、それらの戦争が「キリスト教」に由来すると断ずるには留保が必要なのである<sup>(6)</sup>。

それでは、東方キリスト教から見たとき、戦争はいかなる形象をもって語られるのか。本稿で検討するのはまさにこの問題である。本稿では東方キリスト教から見た戦争の形象について、ロシア正教会主教アントニイ・フラポヴィツキイ（1863～1936年）<sup>(7)</sup>の論考「キリスト教信仰と戦争 *Христианская вера и война*」<sup>(8)</sup>を一次史料として考察する。これは第一次大戦のさなか1915年の著作であり、当時彼は、「キリスト教信仰から戦争を正当化することはいかに可能か」という問い合わせを受けていたという<sup>(9)</sup>。第一次大戦は西方キリスト教世界に大きな影響を及ぼしたが<sup>(10)</sup>、アントニイははたしてこの戦争をどのように説明したのか。その見解は、いかなる神学的思索によって導かれたのか。その思索を構築する概念には、東方キリスト教に特有なものがあるのか。彼のいう「キリスト教信仰」とはいかなるものか。本稿では、以下、『聖書』の記述と「キリスト教」の教え、アントニイの第一次大戦観、アントニイから見た当時の反戦論、アントニイから見た戦争における殺人の意味に着目して、アントニイの見解を論じることとする。

## 1. 『聖書』の記述と「キリスト教」の教え

アントニイは、その論考「キリスト教信仰と戦争」（以下、本論考）の冒頭で、「様々な人から私は、「キリスト教的観点から戦争を正当化することはいかに可能か」ということについて文書で問い合わせを受けています」と問題を明記してから、すぐに「この

ような一般的な形で立てられた間に答えるのはまったく不可能であり、これをより細かな、より明確な間に分ける必要があります」と述べている。なぜ上の間に答えることが不可能なのか。なぜなら、アントニイによれば、戦争を遂行する主体は国家である一方で、キリストとその使徒は、国家について何も規則を定めているわけではないからだという。アントニイは、「キリスト教的観点」について論じる時にまず、キリストの教えと使徒の教えに基づいて説明し、次いで洗礼者ヨハネの教えを紹介している<sup>(11)</sup>。

そのうえでアントニイは、上述の問を、『福音書』でキリスト教国家は戦争を禁じられているか、戦列に加わることに同意したキリスト者は罪を犯しているか、あらゆるキリスト者は戦争の成功に寄付や武器およびそれに類似する手段を仕上げることによって協力する時に罪を犯しているか、の3つに細分化した（第5段落）。これらの問は確かに、上述の問と比べて一層具体的でありまた明確である。しかしそれでもなお、『聖書』の記述に依拠するなら、上述の問い合わせに対する答えは得られないとアントニイはいう。すなわち、「これら三つのすべての問い合わせへの確たる答えをあなた方は、聖書の中には、旧約にも新約にもどこにも見出さないでしょう」（第5段落）というのである。

このように彼は、戦争についてキリスト教信仰の観点から述べるに際し、問題の立て方と論拠の持ち方に細心の注意を払い、与えられた問い合わせに安易に答えることを避けている。

では、『聖書』の中に答えを見いだせない問題について、キリスト教徒は何も語れないのだろうか。彼は、キリスト教徒の中でも、正教徒同士の議論であるなら、本来は全地公会の決議を引用して終わりになるはずだが、実際はそうならないと述べている<sup>(12)</sup>。なぜ全地公会の決議を引用しても議論が終わらないのか。なぜなら、「多くの人にとつてはるかに大きな意味を持っているのは習慣であり、全地公会の決議は現代のキリスト者たちにとって、恥ずかしくも私たちの学校でもまったく知られていない」（第4段落）からである。

他方、当時のロシアで多くの人によく知られていたのは、レフ・トルストイ（1828年～1910年）とその教えであった。トルストイは、その存命中からロシアを代表する著名な作家として、世界中で信奉者を得ていた一方で、その教えは、旧約の十戒や新約の山上の垂訓の記述に基づくと考えられていた。アントニイはしかし、トルストイの信奉者たちが、たとえば旧約に書かれている十戒の中の第六戒「殺してはならない」を論拠として戦争に反対することについて、「無知の表明か、偽善の表明か、それら両方の表明か、いずれにしても、真面目に問題を探求することを望まないとの表明」であって、「不真面目で不誠実な」引用の仕方であると批判している（第6段落）。

もちろん、アントニイも、旧約の十戒を無視しているわけではない。むしろたいへん重視している。少し長いが、アントニイによる十戒の引用を確認する。

「十戒は『出エジプト記』第 20 章に書かれています。この章の中でこそ民に対して、またモーセに対して行われた主の語りが繰り返されているのであり、これがその後、第 23 章最後の節まで中断することなく続いているのです。十戒から始まる、主のこの語りの中でどのような規則と法が述べられているでしょうか。

次の言葉を引用しましょう。「人を殴った人は、そのせいで彼が死んだなら、死に引き渡される」(出 21:12)。「自分の父または自分の母を悪し様に語る者は、死に引き渡されなければならない」(出 21:17)。「もし牛が昨日も三日目も角で突く癖があり、その主人がこのことについて知らされていたより後に、それを監視せずに、その牛が男か女を殺したなら、牛は石で撃ち殺され、その主人も死に引き渡される」(出 21:29)。神のこの語りの中でこそ戦争について語られています。「もしお前が私の声に従い、[お前に] 語ることすべてを実現するなら、敵によってお前の敵を、反対者によってお前の反対者を…私は[お前の顔の前から]根絶するだろう」(出 23:22-23)。

重ねて主はモーセの手によって再び『申命記』第 5 章の中で十戒を述べており、自らのその話の中でまさに第 7 章において立法者は次のことを語っています。

「お前が向っている土地に、そこを占有するために、お前の神、主がお前を導いて、お前の顔の前から数多くの民を追い払い…彼らを擊破するために主がお前に彼らを引き渡す時、その時には彼らを呪いへ引き渡せ（すなわち一人ずつ打ち殺すこと）、彼らと同盟を結ぶな、彼らを容赦するな」(申 7:112)。「主、お前の神がお前に与えたすべての民を根絶せよ、そうだ、お前の眼が彼らを容赦しないのだ」(申 7:16)。

立法者の語りは第 27 章まで続き、第 20 章では戦争について語られています。すなわち、「お前の神である主がお前に支配するために与えた、これらの民の町では、一つの魂も生かしておいてはいけない。彼らを呪いへ引き渡せ」(申 20:16)。(第 7 段落から第 10 段落)

このように、アントニイも十戒に依拠しているが、その中の一つの戒めだけではなく、その中にある殺人に関する記述を一通り網羅して、その上で、自分の結論を引き出している。彼はいう。

「これらのどこに殺人の禁止がありますか。明らかではありませんか。戒めによって禁じられているのは、戦争でも死刑でもなく、憎悪や独断によって引き起こさ

れる個人的な殺人なのです。」（第 11 段落）<sup>(13)</sup>

アントニイの結論は明快である。彼は旧約律法の十戒から得たこの結論を、その後他の聖書箇所を論拠として支持している。その論拠の一つが、旧約の歴史書の一つである『士師記』である。彼はいう。

「[1914 年の] 宣戦布告に続き、今までかなりの程度続いている道徳的な高揚は、かの不可避の罪の豊富な贖いですが、この贖いにあらゆる戦争は富んでいます。『士師記』を手に取りなさい。その第 2 章には民の暮らしのこの法則が述べられています。政治的な平和の時代、ユダヤ人たちは、淫蕩と偶像崇拜へと墮落していました。その時に主は敵の民族を彼らに向けて派遣したのです。民は祖国防衛のために立ちあがり、道徳的に変貌し、自らの過去の背教を嘆きました」（第 24 段落）。

アントニイはここで、戦争を一つの「贖い」、すなわち民全体の「道徳的変貌」のために始められるものであると考えている。後述することになるが、この考えは、大衆の墮落と腐敗が戦争の一因を為しているという大衆批判につながっている。

その上彼は、文明の歴史において戦争は不可避であるという考え方をイエス・キリストの言葉の解釈に基づいて開陳している。

「一つも裁判のない、一つも牢獄のない、一つも戦争のない国家は一度も存在しません。我らの同時代人が抱いている、耐え忍んでいる戦争〔第一次大戦〕が歴史における最後のものとなってほしいという願いは、現実やその激化したナショナリズムとも、また終わりの時に、皇国<sup>(14)</sup>は皇国に対して、民は民に対して立ち上がるという、救い主のまったく明らかな予言ともまったく矛盾しています（マタ 24：6-24 を参照、またルカ 21：10-26 を比較）」（第 13 段落）。

以上の通り、アントニイは、『聖書』の旧約からキリスト教の教えを導く場合、旧約律法の中の一つの戒めからだけでなく、十戒であるならその全体、そして旧約の歴史を参照し、その結論をキリストの言葉と照合している。彼の解釈によれば、『聖書』で禁じられているのは戦争や死刑ではなく個人的な動機による殺人であって、戦争の原因には民の間に蔓延する罪があるという。

彼が十戒の第六戒に立脚した反戦論者を「真面目に問題を探求することを望まない」、「不真面目で不誠実な」な人と批判したのは、彼らが聖書の中から自分に都合のよい部分のみを引用して議論しているからである。彼らの聖書解釈を言い換えれば、「あからさまな曲解」<sup>(15)</sup>となろう。アントニイが批判した反戦論者たちに「曲解」が必要であったのは、思想の矛盾や限界が『聖書』にではなくその人にあったからだと思われる。トルストイがその著作の中で披歴した思想と彼の生き様を実際に支配した思想の間には、

ある種の決定的な齟齬があったのであるが、このことについては、彼の子どもたちが大きな愛情と深い同情をもって語っている<sup>(16)</sup>。

## 2. アントニイの第一次大戦観

上に述べたアントニイの解釈論は、右寄りの保守のものとして理解されるかもしれない。しかし、どんなテキストについても、そのどれか一節をもってその全体の思想を表現していると断定することは、批判の対象になりうる。とりわけ、『聖書』のように何世紀もの時間をかけて完成されたテキストについてはそうであろうし、西欧の自由主義および政教分離の理念が近代に戦争を未然に防ぐことのできない西方キリスト教に対する失望から生まれたこと、さらには、近代以降、西欧で力をもった自由主義的キリスト教も結局第一次大戦の勃発を防ぐことができず、むしろ自由主義の神学者たちの多くが戦争を支持したことを考慮に入れるなら、現在において上の解釈論を単純に右寄りとみなすのは、文明の歴史に対する「無知の表明」として批判の対象になるであろう。

では、アントニイは当時、同時代人として第一次大戦をどのように捉えていたのであろうか。彼が本論考において第一次大戦について述べ始めるのは、以上の通り、問と聖書解釈の方法について留意しつつ、自分の基本的な立場を表明して、「新約にも旧約にも戦争への参加の禁止はない」ことを確認した後のことである。彼はいう。

「オーストリアは、正教のボスニアとヘルツェゴヴィナの併合に満足せず、セルビア王国にオーストリア憲兵隊の国への導入に同意するよう要求する最後通牒を送りました……ロシアは威嚇のかたちでオーストリアの抑圧者としての一歩を阻止して動員を宣言しました。その時、ドイツとオーストリアは私たちに対して宣戦布告したのですが、その戦争に向けてドイツはすでに**40年間準備を進めていた**のです。

自分たちの東方拡大を望んでのことです。」（第18段落）

第一次大戦は、周知の通り、サラエボ事件に端を発した戦争である。アントニイは、この事件の結果を述べつつ、その背景に議論を進めている。すなわち、ドイツはロシアとの戦争のために「**40年間準備を進めていた**」というのである。**40年間**という期間を示していることから、アントニイは、1878年のベルリン会議以降の国際情勢を示唆していると推察されるが、彼の語った「準備」はそれだけではない。彼はいう。

「ただの民から出た変節者たちは、ドイツ人とドイツ〔国家〕の資金の影響で今や相当な数がいます。これが何よりも、偽善的なほどにまで平和を呼び掛けている、かのシトウンド派です。もちろん、彼らの全員が自分たちの祖国を意識的に裏切った

り売り渡したりしているわけではなく、ドイツ政府がシトウンド派のロシアにおける拡大のために支出することを決定した 200 万マルク（そのうちの約半分はカイザルの私財によります）がその全員に分配されたわけではないでしょう。」（第 19 段落）

ここで彼が取り上げているのは、西方キリスト教のセクトであるシトウンド派<sup>(17)</sup>である。アントニイによると、このグループはドイツから資金援助を受けて、平和を主張していたのであるが、この援助は彼らの活動がドイツとオーストリアの勝利に利するからだという。すなわち、第一次大戦では軍事的政治的対立に宗教的対立が利用されていたというのである。この見立てはさらに、アントニイによって、次の、第一次大戦の結末について一つの可能性への視座を開いている。

「両肩の上に頭をもっているあらゆる人は、あなた方に言うでしょう。「今こそ、さらに残酷で恥すべき民族がより弱い民族を迫害し、彼らから巻き上げ、彼らを滅ぼし始めています」と。「それはヨーロッパ人によってアメリカ、オーストラリア、そしてアフリカの一部の民族が滅ぼされたように、そして、諸民族の中の最初のものとしてロシアの民がもっともおとなしく正直な民として滅ぼされるのです」と」（第 20 段落）。

アントニイは、「ヨーロッパ人」が 20 世紀に入るまでに、北米のネイティブアメリカンを虐殺し、中南米の諸王国を滅ぼし、オーストラリアのアボリジニを虐待し、アフリカの黒人たちを抑圧した歴史を前景化している。この歴史を踏まえて彼は、第一次大戦にロシアが負ければ、ロシア人もセルビア人も、彼らと同じように迫害され滅ぼされると考えていたのである。

ただし、ここで「滅ぼされた」といわれている「民族」は、血筋としての民族のことだけを指しているわけではない。アントニイはすでに、「正教のボスニアとヘルツェゴヴィナ」と述べて、それとセルビア、そしてロシアの結びつきに言及している。つまり、ここで滅ぼされるといわれている「民族」は、正教徒なのである。このように、アントニイから見た第一次大戦は、ドイツとオーストリアがその領土欲のために引き起こした戦争であったが、同時に、正教諸国民が正教諸国民として存続し得るか否かの瀬戸際にある戦争、言い換えれば、信仰と文化を賭けた戦争という側面を併せもっていた。

他方で彼は、ドイツ人とオーストリア人、そして西方キリスト教のセクトに移った人々を一方的に批判したわけではない。アントニイの批判はロシア人の側にも向けられている。彼はいう。

「より近くの暮らしを熟視しなさい。本当に、平時に人々の暮らしは流血の惨事抜き

に、あらゆる犯罪抜きに、抑圧、欺瞞、誘惑などなく済んでいるでしょうか。本当に、平時には民の酔っ払いを止め、そのことを通して刑事上の犯罪の数を十倍にも減らすことに成功しているでしょうか。このことについては今や裁判所の統計が示しています。本当に、平時には、憐れみ、寛大さ、自己犠牲といった、いま住民の善良な半数が参加しているところの大衆的な功績があったでしょうか」(第22段落)。

また、

「実に、戦争前のこの十年間のロシアの民の状態を振りかえりなさい。それまで人々はねじ曲がり、ウソつきになっていました。彼らにとって地上には何も聖なるものがなくなってしまったかのように振る舞ったり、また粗野な獣でさえしないようなことを生活の中に持ち込んだり、すなわち、自らの実の子どもたちを殺してしまうということさえ行っていたのです。信念に始まり、すべてが売られるようになります。啓蒙は堕落し、科学は搾取の対象となり、学校は卒業証書の工場へと変わってしまったのです」(第23段落)。

アントニイがここで用いているのは、比較の方法である。比較の対象は平時の社会と戦時下の社会であり、比較の視座は、道徳の有無と社会における悲惨な事件の有無における。戦争に流血の惨事はつきものであり、その悲惨さ故に戦争は批判される。それでは、戦争のない、いわゆる平時に悲惨な事件はないのであろうか。アントニイによれば当時のロシア人の間には堕落と搾取が蔓延しており、「粗野な獣でさえしないようなこと」があったという。このように、ロシア人の多くが平時において堕落していたから、ロシア人の中からセクトに流れる人々（「ただの民から出た変節者」）が増え、結果として、ドイツに対するロシア政府の「威嚇」が役に立たず、戦争が始まってしまったというのである<sup>(18)</sup>。

以上のアントニイの議論には、眞の平和を説き、実現する使命は正教徒であるロシア人にあるという彼の信念が前提としてある。しかし同時に彼は、当の正教徒がロシアでは、「ねじ曲がり、ウソつきになって」いたという現実も視野に入れていた。こうして、アントニイによると、第一次大戦は、スラヴ人の自衛戦争であったと同時に、ドイツ人の欲深さとロシア人の不信仰または不道徳がもたらした戦争であったという結論が得られる。

### 3. アントニイから見た当時の反戦論

第一次大戦について当時、アントニイが問題視したのは、無抵抗主義を主張する反戦

論者の存在であった。彼が当時の反戦論者を問題視したのは、第一に、その唱道者である亡きトルストイ自身が、アントニイによれば、その実現性を信じておらず、実践もしていなかつたからである<sup>(19)</sup>。彼はいう。

「レフ・トルストイでさえ、人生の終わりには自らの幻想のもつ一切の非現実性に気づいて、これを拒否したのです」(第26段落)。

トルストイは、1893年に『神の王国は汝らの内にあり』を発表して無抵抗主義を開陳したが、日露戦争が続いている1905年になると自分の所領を守るために警護兵を私費で雇い入れ、その5年後に家出して死んだ。アントニイはこのことを指摘している。トルストイの思想と生き様については、その実の娘であるタチヤーナが、彼を理解した人は彼の真似をしないという同時代人の批評を引用している<sup>(20)</sup>。つまり、彼は自らの言葉で述べた思想を実践していなかつたというのである。彼女は自分の父親の思想の非実践性について彼の柔軟さによるものであったと説明しているが、アントニイはより辛辣であった。

トルストイに対するアントニイの辛辣さは、二人の立場の相違を知ることなくしては理解しにくい。すなわち、アントニイは由緒ある貴族の家系に生まれ、中学生の時にはペテルブルグ最大のイサク大聖堂で主教の補佐をするほど恵まれた環境で育った。彼の家には日本にキリスト教を伝えた宣教師ニコライが日本宣教の資金調達のために訪問したことあった。トルストイも伯爵という貴族の家系に生まれた。つまり、二人は生まれにおいては、何かに抵抗しなければならないような苦境におかれる身分になかつたのである<sup>(21)</sup>。

ところが、その後の人生において二人の立場は大きく変わっていく。トルストイは作家となった。作家は芸術家であり、芸術家の仕事は、言葉であれ他の媒体であれ、自らの夢や幻を描くことであって、その模倣や実践ではない。自らが語った夢に対して責任を負う必要もない。他方、アントニイは高位聖職者となった。高位聖職者は信者に——町の司祭も若い修道士も老若男女問わず一般信徒も含めて——実践できる教えを伝える義務がある。そして、その教えに責任を負う。

アントニイがトルストイの無抵抗主義を非現実的な「幻想」と切り捨てたことの理由は、上に述べた高位聖職者としての彼の義務と責任から必然的に明らかになる。そして、彼が無抵抗主義について語るなら、次のようになる。

「平和を意識的に拒絶する、例外的に信仰熱心な人々に可能な自己犠牲の要求、すなわち、民全体の自衛を禁止することを、「身重の女と乳飲み子を持つ女」〔マタ24：19〕、幼児や少年、未成年者、少女や女たち——彼女らにとって女性の貞節は命そ

のものより大切です——に押しつけるなら、そのような禁止は、まったく分別のない事柄になるでしょう」（第28段落）。

ここで述べられているのは、人間社会における立場の多様性である。彼の考え方は、東方キリスト教、とりわけ正教会においては修道士と一般信徒の生き方の違いが認められているということ抜きには理解しにくいかもしれない。すなわち、東方キリスト教徒には、信仰のために自分の身体を含め、私財の一切を放棄する修道士すなわち「例外的に信仰熱心な人々」もいれば、信仰をもちはするがこの世の喜びを捨てることが出来ない成年男子もいて、このことについてはすでに新約文書の中でパウロが語っている。

「男は女に触れない方がよい。しかし、みだらな行いを避けるために、男はめいめい自分の妻を持ち、また、女はめいめい自分の夫を持ちなさい」（一コリ7:2）。

また、

「皆わたしのように独りでいるのがよいでしょう。しかし、自分を抑制できなければ結婚しなさい。情欲に身を焦がすよりは、結婚した方がましからです」（一コリ7:8b - 9）。

さらに現実社会には、自分の身を守ることのできない幼児や児童、さらには、妊婦や乳幼児連れの女性もいる。それゆえ彼は、修道士と修道士出身の高位聖職者である黒僧（黒色神品）に対しては無抵抗主義を教える一方で、幼児や児童、少女、妊婦や乳幼児連れの女性といった社会的弱者には自衛せよと、またはそのために国家に頼ってもよいと教え、健康な成年男子に対しては弱者を守ることを教え、町で家庭をもち人々を指導する司祭（白僧または白色神品）には、やはり弱者を守ることを教えるのが現実的だというのである。そして、健康な成年男子が弱者を守るためのひとつ的方法が戦地へ行くことだった。彼はいう。

「私は戦争を称賛しているわけでも、正当化しているわけでもありませんが、皇帝や政府、民や個々の市民が戦争から逃げ出すことよりも悪いことではないと考えているのです」（第34段落）。

アントニイから見て、国家は弱者保護のために不可欠な機関であり、そのために働くのは第一に健康な成年男子であった。そして、戦時における国家と健康な成年男子の働きは、祖国の社会的弱者を敵国兵士の暴力から守ることだというのである。

このように、キリスト教徒（正教徒）の立場や社会情勢には多様性があり、それに応じた教えが説かれるべきだとアントニイはいう。こういった人々の生き方・立場の違いを無視して、旧約十戒の中の一つの戒めだけをもって社会の全体を語るのは非現実的であり、このように語ることを「分別のない事柄」と断言するアントニイの論理は理

解できる<sup>(22)</sup>。それゆえまた、そのように語る人々がアントニイによって、「無知の表明か、偽善の表明か、それら両方の表明か、いずれにしても、眞面目に問題を探求することを望まないこの表明」をしていると、また「不眞面目で不誠実」だと批判されていることも理解できよう。

こうした形でアントニイが示唆した分別ある教えを図示したものが、次の図である。

(図) 正教徒の立場と戦争に関する教え

		正教徒			
立場	神品（聖職者）		一般信徒		
	修道士 (黒色神品)	町の司祭 (白色神品)	社会的弱者		健康な 成年男子
教え	抵抗するな	弱者を守れ	幼児・児童 (少女含む)	妊婦・乳幼児 連れの女性	
			自衛せよ (国家に頼ってもよい)		弱者を守れ (戦地に行け)

加えて、アントニイは、もう一方の反戦論者であるシトウンド派の平和への訴えについて、その活動時期と活動場所を問題視している。彼はいう。

「私たちは、1905年に平和を呼び始めた人々の誠実さを一度も信じたことがありません。彼らが〔平和を〕呼び始めたのは、まさに日本人に対する私たちの勝利の側へと〔戦局が〕転換しつつあった1905年であり、私たちがドイツ人に打ち勝ち始めた1915年なのです」(第19段落)。

アントニイによると、彼らは1905年、すなわち日露戦争の局面が転換しつつある時期に平和を呼びかけたという。つまり、戦争が長期に続き、戦局がロシアに有利に傾きだした段階で、彼らはロシア人の間で平和を呼びかけるようになったが、同様に、第一次大戦が続き、1915年に戦局がロシアに有利に展開するようになった段階で、彼らはロシア人の間で平和を呼びかけるようになったというのである。もしも彼らが誠実に平和を望んだのであれば、セルビアに対するオーストリアの最後通牒の前からオーストリア国内で運動を始めていたはずだというのである。このようにして、彼らの平和運動はドイツとオーストリアを利するものであり、ドイツから彼らへの資金援助があるのもこのためだというアントニイの論理は理解される。

以上の通り、アントニイが批判した反戦論者とは第一に、トルストイも実践しなかつた——というより、実践する必要のなかった——無抵抗主義を掲げたトルストイ主義者

であった。彼らは社会に生きる人々の多様な暮らし方に目を向けず、聖書の中の短い一節に基づいて自分たちの社会的責任を放棄しようとしている批判された。第二に、ドイツとオーストリアの勝利に加担する形で平和を呼びかけた西方キリスト教のセクトであった。彼らの平和運動は共に、意図していなかったとしても、強者による弱者切り捨て、神と祖国への裏切り、侵略者への協力として意味付けられた。

#### 4. 愛敵の教えと戦場における殺人

以上のアントニイによる意味付けが正教信仰において真の平和がもたらされるという確信に支えられていることは、いうまでもない。では、正教信仰においてもたらされる真の平和とはどのようなものか。アントニイは、キリストが語った、「あなた方の敵を愛しなさい」という教えについて次のように説明している。

「[キリストの] 教えの本当の意味はどのようなものでしょうか。これが個人的な敵への愛を求めていることに、もしキリストの言葉をこの章の最後まで読み通したなら、誰も反論することができないでしょう。「私はあなた方に言います。あなた方の敵を愛しなさい。あなた方を罵倒する人々を祝福しなさい。あなた方を憎む人々に慈善を施しなさい。あなた方を侮辱しあなた方を迫害する人々のために祈りなさい。そしてあなた方の天の父の息子となりなさい。なぜなら、彼は自らの太陽に悪人の上にも善人の上にも上るように命じ、正しい者にも正しくない者にも雨を下さるからです。もしあなた方が、あなた方を愛する人々を愛したからといって、あなた方にどんな褒美があるのですか。収税人も同じことをしているではありませんか。また、もしあなた方があなた方の兄弟だけに挨拶をしていたなら、特別な事をしているのですか。異教徒も同じことをしているではありませんか。だから、あなた方の天の父が完全であるように完全でありなさい」(マタ 5:44-48)」(第36段落)。

アントニイが、キリストの言葉をこのように長々と引用したのは、トルストイの次の言葉に反駁するためである。

「敵を愛しなさいですか。それはできません。つまり、それは素晴らしいユートピアかもしれませんのが、理性ある教えではありません。キリストが人々に出来ないことを求めるはずはないのです。私は自分の敵を憎まないことはできますが、彼らを愛することはとても考えられません」(『神の国は汝らのうちにあり<sup>(23)</sup>』)。(第36段落)。

アントニイは、1888年にすでにキリスト教の観点からトルストイの著作への反論を記していた<sup>(24)</sup>。このトルストイ批判に基づいて、アントニイは、上の引用文を用いているのであるが、彼はこの言葉のうちにトルストイの本音を読み取っている。その一方で、自分の敵を愛するということについて、次の具体的な事例を挙げている。

「今年の初めに私がハリコフの工兵キャンプへ宗教的な話し合いのために来た時、当直の士官が私にゲオルギー十字を授与された兵士を見せてこう言いました。『私たちは彼とこの数日間、ここに立場の修正のために来ています。彼は、最初の攻撃の終わりにオーストリア人の肩を砕きましたが、すると、水を探りに走りだし、自分の帽子に水を入れて持ってきて、敵の傷を洗い、自分の下着で縛り、自分の両肩に彼を担いで、一番近くの医療地点まで運んだのです』」（第38段落）。

アントニイがこの兵士の振る舞いを紹介したのは、これこそキリストが教えた愛敵の教えの模範だというためであろう。すなわち、戦場で兵士は、恐怖、裸き、不安、怒り、嘆き、悲しみといった様々な強い負の感情に襲われるが、その種の感情についてアントニイは、日常生活においても、さらには、「他の争い難く上品な種類の奉仕や活動でも、また聖なる種類の奉仕や活動であっても」（第40段落）受けることがあるという。すなわち、病院や狂人収容所の医師や看護婦、学校教師や親たちは、患者を介抱する際に、または子どもたちを養育する際にイライラした感覚を覚えることがあるであろうが、兵士たちが戦場で感じるという強い負の感情は、このイライラの延長線上にあるというのである。

こうして戦地と日常生活における心理状態を比較した結果、同種のものとみなしたアントニイは、この心理から兵士を救うためにも、戦地へ送り出される若い兵士たちには、教会の神父から祈りと祝福を与える必要があるという。すなわち、彼らが戦地で不可避の暴力は、あくまでも祖国防衛という目的のためであって、暴力行為それ自体が目的ではないのだから、教会で祈りと祝福を受けることによって、兵士たちは、教会の神父たちと共に、怒りを好ましくないものと考え、戦闘行為が中止すれば、速やかに傷を負った人を敵味方問わずに介抱することが可能になるというのである。そして、これが可能となる状況において、兵士たちの善行は、暴力が吹き荒れる中での「貞節と敬虔な行い」として受け入れることができ、教会によって擁護されることになる。

アントニイは、議論がこの段階に入って初めて、全地公会の決議に言及し始める。この段階とはすなわち、戦争が歴史の中では不可避であること、戦争を禁止する教えはキリスト教にはないこと、戦時における対応の教えには立場に応じた多様性があること、キリストの愛敵の教えの模範を示し、これらを前提としたキリスト教共同体（教会）に

民も兵士も属していることを読者との共通認識として前景化した段階でという意味である。アントニイによってこの共通認識は、全地公会決議を理解するために不可欠なコンテクストとなっている。彼が引用する全地公会の決議は、次のものである。

#### 聖大ワシリイ<sup>(25)</sup>の教会法の規則（第13規則）

「戦における殺害を私たちの師父たちは〔一般的な状況下での〕殺人に帰することなく、貞節と敬虔な行いの熱心な擁護者〔兵士〕を赦したと私には思われます。しかし、おそらく彼らは汚れた手を持つ者として3年間、聖なる機密の聖体拝領だけは留め置かれることになると、善が助言されたでしょう」（第40段落）。

#### 第六回全地公会<sup>(26)</sup>の決議

「人生の様々な場面において私たちは、ある状況下で起りうる相違をもっています。例えば、殺人は赦しがたいのですが、戦において敵を殺すことは正当であり、賞賛に値します。このように大きな敬意を享受するのは、戦における勇敢な者たちであり、彼らによって卓越した行動を知らせる柱<sup>(27)</sup>はそびえ立っているのです。こうして、同様に時代に即してみるなら、一つのことが、ある状況では赦しがたいのですが、他の状況では適時であり、認められ、赦されるのです。肉体的結合についても同様に論じるべきです。自由な夫婦を為して本性を出産に用いる若者は幸いです。しかし、色欲に至るなら、淫蕩な人と姦通者は、使徒たちによって布告された罰を受けています」。

東方キリスト教の聖人ワシリイが記し、全地公会で承認を受けた規則によると、戦争で敵を殺した兵士は、3年間の聖体拝領禁止の罰を受けたという。アントニイは、この罰の意味合いを説明するために、他の事例を引き合いに出している。すなわち、当時の教会法によると、齋<sup>(28)</sup>の違反は2年間、淫乱は7年間、姦通は15年間、墮胎は10年間、拷問の恐怖によるキリスト信仰の隠匿は20年間、嘲笑の恐怖によるキリスト信仰の隠匿は死ぬまで聖体拝領を禁止されたというのである。そして、アントニイは、自分は安全なところにいて若い兵士たちを批判する反戦論者たちの知識人を念頭に置いて、「現代の知識人は最後の罪に問われないのでしょうか」と問うている。

このように、戦争について非難されるべきは、開戦を決断した政治家ではなく、戦地で人を不可避的に殺した兵士でもなく、平時においてキリストの説いた愛敵の教えを曲解して指導も実践もせず、そのために開戦を止められず、兵士を戦地へ送らざるを得なくした知識人、わけてもトルストイの信奉者であることをアントニイは示唆しているのである。

## おわりに

アントニイは、当時欧洲で始まっていた第一次大戦をオーストリア人とドイツ人の欲望とロシア人の不信仰のために避けられなかつた、正教徒の自衛戦争として説明した。また、シトウンド派やメノナイト派といった西方出自のキリスト教セクトにより当時ロシアで展開されていた反戦運動がロシア侵略の道具として利用されていたという。

アントニイの議論は、上のキリスト教セクトに加えて、ロシアの文豪レフ・トルストイの信奉者も論敵として構築されている。アントニイによれば、戦争は悪であるが、トルストイの説いた無抵抗主義は、戦時においては国家や成年男子が社会的弱者の保護を放棄することにほかならず、戦争より悪いという。

アントニイの「キリスト教的観点」は、聖書の中の短い一節を単純に一般化したものでなく、聖書と教会法、そして歴史を広く視野に入れた上で示されている。アントニイのいう「歴史」には士師の時代も含まれ、その中で繰り返される戦争は、世の終わりまで繰り返される人の欲望と不信仰の結果として捉えられる。彼は、旧約十戒の第六戒（殺してはならない）だけを論拠とする反戦論者を、「眞面目に問題を探求することを望まない」「自分自身信じてもいない神の言葉を引用する」と批判している。

アントニイの議論の大前提是正教徒としての立場である。それは第一に、黒僧と白僧、そして一般信徒の区別である。この区別は教会運営に関する権威と権利に関する相違を伴っているが、同時にそこにはキリスト者としての倫理の違いが反映されている。そして後者の相違が反映されるからこそ、アントニイは教会制度そのものを批判せず、むしろ人の現実に適した制度だと考えている。

第二に、モーセの戒め、キリストの教え、使徒の教え、全地公会の決議の間に矛盾を認めない。例えば、聖書正典の構成が持つ権威は歴史的には全地公会の決議に拠っている。この歴史的事実を認める時、聖書のみに依存する「キリスト教信仰」はあり得ない。とはいへ、アントニイは現実的であり、「多くの人にとてはるかに大きな意味を持っているのは習慣」であり、キリスト教史を知らない人との議論で全地公会の決議を引用することは、「壁にエンドウ豆を投げつける」ことだと述べている。

第三に、アントニイは、戦地における愛の実践に不可欠なものとして教会による定義付けと祈祷、祝福を重視している。これは若い兵士たちの精神疾患が問題視されている昨今、興味深い問題であろう。教会による祈祷や祝福がもたらす心理的作用について論ずるにはまだ十分な資料が揃っていないが、この作用に関する研究は、困難に直面した人々の精神を守るために文化的方法としても将来の課題となりうる。とりわけ近年、東

北大震災を受けて、悲しみに沈む人々のケアの観点から公共性を持った宗教的営為と宗教者の営みの価値が問い合わせられるようになっていることに鑑みれば<sup>(29)</sup>、この課題の重要性も見えてくるであろう。

アントニイの議論からは、キリスト者が反戦を訴えるなら、まず日常生活において自分が誰かを憎んだことがあるかを問い合わせ、他人のことでイライラしたことがあつたら、それを悔い改めるために神に祈り、傷つけた人がいたら謝罪してその人の許しを乞い、また家族と資産があるなら、家族を捨てて自分の資産を投げ出し、聖書の言葉に忠実に従う方が先だという結論が得られる。正教世界でこれを実現しているのは修道士であり、教会共同体の管理は修道士出身の黒僧に多くを委ねている。

アントニイは貴族の家系に生まれたが、後に修道士となった。同様に貴族の家系に生まれたトルストイはしかし、後に教会を非難し、聖書のみに依拠して平和を呼びかけながら、人生の終わりまで自分の資産と家族に執着した。だからアントニイは彼を非現実的な幻想に取り憑かれた偽善者として批判している。アントニイによれば、戦争についてキリスト教信仰に基づいて非難されるべき人がいるとすれば、それは参戦を決断した政府要人でも戦地で殺人を余儀なく犯す兵士でもなく、普段の生活において信仰を軽視しているブルジョアジーと知識人、当時のロシアで言えば、トルストイの信奉者であった。

トルストイに対するアントニイの批判については、前者が 1901 年にすでにロシア正教会によって破門されていたことを補足しておく。トルストイとキリスト教の関係について、本論の補遺として、ロシア正教会聖務会院によるトルストイ破門に関する決議文を訳して掲載した。これは当時のロシアのキリスト教会がトルストイをどのように考えていたか（今なお考えているか）を知る上で格好の資料である。

なお、アントニイの見解と彼の議論に基づいた見解に異論のある方々は当然少くないであろう。アントニイは、細かい点まで様々な前提を上げて議論を組み立てているが、本稿では、そうした点を省略して説明した部分がある。本稿で取り上げたアントニイの論考は、1988 年にニューヨークにある在外ロシア正教会の修道院で英訳されて小冊子として出版されているので、そちらも併せて読まれたい<sup>(30)</sup>。

最後に、本稿では、アントニイの言葉を著者の問題意識に即して分析して情報を整理し、解釈することに努めたので、その記述の史実性についての論及が残されている。また、ここで示された彼の見解が他の他の論考といかなる関係にあるのか、ロシア社会における位置づけの問題なども残されている。これらも今後の課題である。

補遺（翻訳<sup>(31)</sup>）

聖務会院の決議

1901年2月20-23日付第557号

正教信徒への書簡付

ギリシア・ロシア教会

レフ・トルストイ伯爵について

「至聖なる聖務会院は、正教会の子らについて、破滅的な誘惑から彼らを守ることについて、誤解している人々の救いについて、自らの監督において、レフ・トルストイ伯爵及びその反キリスト教的かつ反教会的偽教説について判断を下し、以下の自らの書簡を『教会報知』に掲載することを通して世に知らしめることが、教会的平和を破壊から守るために適時であることを認めました。すなわち、

神の慰めにより、至聖なる全露聖務会院は、正教カトリック・ギリシア・ロシア教会の忠実なる子らに伝えます。

主について喜びなさい！

「私は願います。兄弟たちよ、教えの他に争いや不和をもたらす者たちから身を守りなさい。このことを覚えなさい。そして彼らから離れなさい」（ロマ 16：17）。

当初よりキリストの教会は、多くの異端者及び偽教師たちからの罵倒や攻撃に耐えてきました。彼らは教会を覆し、生ける神の子キリストへの信仰において認められる本質的な基礎を搖るがようと試みたのです。しかし、地獄のすべての勢力は、主への誓約に従って永遠に負かされることのない聖なる教会を打ち負かすことができませんでした。そして、現代に神の災いとして現れたのが、新たなる偽教師すなわち、レフ・トルストイ伯爵でした。

世界的に有名な作家、生まれに従ってロシア人、自分の洗礼と養育に従って正教徒である伯爵トルストイは、自分の傲慢な理性の誘惑に従って、大胆不敵にも、主とそのキリストおよび聖なるその所有物に抗議して、自分を養育した母なる正教会をすべての人々の前で歴然と拒絶し、自分の文学活動と神から自分に与えられた才能とを、キリストと教会に反する教えを人々に広めること、ならびに人々の理性と心にある父祖の信仰である正教信仰を根絶することに費やしました。私たちの父祖はこの信仰により生きて救われ、また今に至るも聖なるルーシが守られ力強かったのは、この信仰によるのです。

自らの文学作品及び彼とその弟子たちとによって世界中にまき散らされた多数の手紙の中で、とりわけ愛すべき私たちの祖国で彼が狂信者の羨望をもって説いたのは、正

教会のすべての教義及びキリスト教信仰の本質そのものの打倒でした。すなわち、人格をもった生ける神、称えられる至聖三者すなわち永遠の創造者にして保持者、主なるイエス・キリストすなわち神の人、慰め主にして世界の救い主、私たち人のために苦しみ、私たちの救いのために死者の中から復活された方、人の手に依らない主キリストの受胎、生まれるまでも生まれてからも清らかな生神女にして永遠の乙女マリアを彼は否定し、死後の命と贖いを認めず、教会のすべての機密ならびにそれらにおいて恵みをもって働く聖靈を拒絶し、正教の民の信仰の聖遺物自体に悪態をつき、機密のもっとも大切な聖体への愚弄を受けて戦くことがないのです。これらすべてを説いたのが伯爵レフ・トルストイであり、彼は、発言と執筆活動によって正教世界全体を誘惑し戦慄させ、またそのことによってすべての人々の前で隠すことなくあからさまに、意識的かつ意図的に、自分自身を正教会とのあらゆる関わりから断ったのです。

彼を教え諭そうとした様々な試みは失敗に終わりました。それゆえ教会は彼を自らの一員と見なさず、また彼が悔い改めて教会との結びつきを回復するまでそのように見なすことができません。いま私たちはこのことについてすべての教会の前で、右に立っている人々〔神の前で救われる人々〕を確信させるために、また誤解している人々を教え諭すために、とりわけ、トルストイ伯爵本人を教え諭すために証しているのです。信仰を保持している彼の近親者の多くは、彼が教会の祝福と祈祷とを否定して、自らの日々の終りに教会との一切の関わりを断ったまま、神および私たちの救い主である主への信仰のないままでいるであろうことを、悲嘆にくれながら想像しています。

このため、彼の教会からの離脱について証しつつ、私たちは同時に神に祈ります。願わくは主が彼に真実の理性への悔い改め（二テモ 2：25）を与え賜わんことを。

私たちは祈ります。憐み深い主に、罪人を死から救い、願いを聞き入れ、彼を聖なるあなたの教会に連れ戻してください。アーメン

〔以下、署名は省略〕

---

(1) たとえば、土井健司『キリスト教は戦争好きか キリスト教的思考入門』(朝日新聞出版、2012年)は、こうした論調に対するキリスト教側の弁明の形で議論を起こしている。宗教が戦争の原因を為していると考えられる、いわゆる宗教戦争に関する最近の研究は、黒川知文「宗教戦争の本質構造——宗教と民族主義——」(『宗教研究』78 (2)、2005年)、西谷幸介「戦争と平和について——キリスト教倫理学の視点から——」(『キリスト教と文化』25、2009年)などがある。

- 
- (2) 第一回（1096—99年）から第八回（1270年）まで、またアルビジョア十字軍（1209—29年、対フス十字軍（1147—49年）などが「十字軍」の名の下で派遣された。
- (3) 「宗教改革」といえば、従来、プロテstantt成立をもたらした一連の運動を指す大文字の *Reformation* の邦語訳として用いられている。しかし、世界にはキリスト教以外にも「宗教」があり、それらもまた「改革」を行っているのであるから、「宗教改革」の語を即 16世紀から欧州で行われたキリスト教の改革運動とみなすのは、文明学の観点からすると不適切であろう。
- (4) ドイツ農民戦争（1524年）に始まり 17世紀の 30年戦争（1618～1648年）に至るまで。
- (5) 「東アジアキリスト教交流史研究会（仮称）設立の呼びかけ」（2012年12月8日キリスト教史学会東日本部会配付）による。
- (6) キリスト教神学において戦争を肯定する、いわゆる正戦論の最初の理論家がラテン教父のアウグスティヌスであることは、この文脈によくあてはまる。小原克博「戦争論についての神学的考察——宗教多元社会における正義と平和」（『基督教研究』第64巻第1号、2002年）、西谷幸介「戦争と平和について——キリスト教倫理学の視点から——」（上掲）、このほかに『岩波キリスト教辞典』「戦争」の項を参照。
- (7) アントニイ・フラボヴィツキイという人物は、20世紀のロシア正教会史でもっとも重要かつ影響力ある神学者、主教の一人である。彼の生涯は政治によって大きく影響された。例えば彼は 1905年の革命に際して帝政を支持したことから、ロシア共和国政府もボリシェヴィキ政府も彼を引退させるために教会に圧力を加えたのであるが、時の政権がそのイデオロギーの違いを超えて彼の去就をめぐり教会に圧力を加えたことは、彼の影響力のほどを物語っている。他方で彼は、ニコライ・ベルジャーエフやセルギイ・ブルガーコフ、ヴラヂミル・ソロヴィヨフといった当時を代表する宗教哲学者との間で、キリストの贖いの解釈や三一論における神智の解釈など、キリスト教神学の中心的なテーマにおいても様々な議論を戦わせている。何より彼については、1917年の革命当時、ロシア正教会最高指導者（モスクワ総主教）候補者選挙において最大得票を得たという点を無視することはできない。当時、ロシアを代表するキリスト教徒たちは、彼を自分たちの指導者に望んだのである。その後彼は、1918年以後に白衛軍下の教会で、1921年以後に亡命教会でその最高指導者に選出されたが、ロシアの左翼は彼に極右のレッテルをはり、彼の神学を排除しましたは無視し続けた。筆者は、ソ連解体後の 1990 年代に大学院で亡命ロシア人のキリスト教を主題として研究を始めたが、間もなく彼の評価の是正が必要だと考えるに至った。そこで、1999年にキリスト教史学会で（「キエフ府主教アントニイとロシア正教会の保守性」（『キリスト教史学』（第54集、2000年）に要旨が掲載）、2002年に来日ロシア人研究会で彼を主題とした研究を発表した（「府主教アントニイ・フラボヴィツキイと極東の教会」（「亡命ロシア正教会内の確執と極東の宣教会」と改題・改稿して『異郷に生きる II』（成文社、2003年）に掲載）。奇しくも当時、ロシア正教会において本国教会と亡命教会の和解交渉が進んでおり、その後和解が既定路線となると、2006年にニューヨークの在外ロシア正教会修道院でアントニイに関する国際会議が開かれ、2007年には彼の論集がモスクワ神学院によって出版された。本稿で取り上げる彼の論考は、上の論集に収められた著作の一つである。
- (8) *Антоний (Храповицкий). Христианская вера и война //Собрание сочинений. т. 1. М. 2007 г. С. 884-899.*
- (9) アントニイは、この問い合わせの背景について何も述べていないが、当時、プロテstanttの牧師の多くは、第一次大戦の開戦を支持していたことを指摘しておく必要がある。
- (10) 19世紀にプロテstantt神学の主流であった自由主義を 20世紀に継承した牧師連は、キリスト教国家同士の戦争（第一次大戦）を自分たちの神学に基づいて支持した。このことから、プロテstantt内部でも自由主義の限界が指摘され、これに失望したカール・バルトらによって弁証法神学（別名「危機の神学」「新正統神学」）が成立した。小田垣雅也『キリスト教の歴史』（講談社学術文庫）240頁、マーティン・マーティ『世界の中のキリスト教』（竹田綾子訳、2008年、ランダムハウス講談社）207頁、アリストー・E・マクグラス『キリスト教思想史入門 歴史神学概説』（キリスト新聞社、2008年）302—306、309—311頁。
- (11) 彼が引用している聖書箇所は次の通りである。マタ 22：21（皇帝の法によって定められた租税を払うこと）、ルカ 4：13（収税人や軍人に対して、その職務自体を批判するのではなく、悪

---

用を赦さないこと）、ルカ 23：41（「我らは公正に裁かれている。なぜなら自分の仕事に即して当然のものを受取ったからだ。だが、彼〔キリスト〕は何も悪いことを行わなかつた。」）、ロマ 13：117（国家権力に服従すること）、一テモ 2：112（権力にある人々のために祈ること）、ペト 2：13（国家元首に服従すること）。

- (12) 正教会において全地公会で承認された教えのみが教義または教会法とみなされ、聖書正典の範囲もその権威に拠っている。
- (13) 徳永文和氏は、「律法五書」の考察の結果、「モーゼの十戒の一つ、「汝、殺すなかれ」は、処刑と戦争時における殺害行為に関しては例外である」と述べている。この見解は、まさにアントニイの結論と同じである（徳永文和「ジョゼフ・ド・メーストルの戦争論と処刑論—「律法五書」における応報刑論的記述との異同性に関する考察—」（『Gallia』48、2008年）。
- (14) ロシア語では *царство*、国 *страна* とも国家 *государство* とも違い、また帝国 *империя* とも違う。「ツアーリ *царь*（皇帝）の統治する国家」のニュアンスをくみ取って「皇国」と訳した。アントニイは本論考の第 12 段落で、「旧約の教会は一定の領土と民族によって区分された当時の国家 *государство* だったが、新約の教会は精神的な皇国 *царство* であり、国家ではない」と説明している。
- (15) ロトマン「テキストのタイポロジーの問題に寄せて」『文学と文化記号論』（磯谷孝訳、岩波書店）1979 年。93 頁。
- (16) イリヤ・トルstoi 『父トルstoi の思い出』（青木明子訳、群像社、2012 年）、タチヤーナ・トルスタヤ『娘のみた文豪の生と死』（木村浩・関谷苑子訳、TBS ブリタニカ、1977 年）。
- (17) シトウンド派は、19 世紀にロシア南部で広まった福音主義の洗礼派の一派であり、キリスト教の機密も神品も齋も認めない。シトウンド派の名称は、ドイツ語の *Stunde*（時）から取られたという。
- (18) アントニイによると、ロシア人たちに正教徒としての道徳的な力さえあれば、国家としてのロシアが滅んだとしても、正教徒としてのロシア民族は生き残り、信仰の継承は可能であったと期待することができたはずだという。
- (19) トルstoi は自分の伯爵領を守るために警備を雇い入れていたのであるが、アントニイはこのことを念頭においている。
- (20) タチヤーナ・トルスタヤ『娘のみた文豪の死』（上掲）209 頁。
- (21) トルstoi は伯爵という貴族階級に属しており、帝政ロシアでは自分が何者であるかを明かせば、黙っていても守られる存在だった。つまり彼は無抵抗主義を説いたが、そもそも何かに抵抗せねばならないような状況にはおかれてなかったのである。イリヤ・トルstoi 『父トルstoi の思い出』（上掲）221 頁、タチヤーナ・トルスタヤ『娘のみた文豪の死』（上掲）233 頁。
- (22) 西谷氏は、トルstoi の無抵抗主義をインドのガンディーおよびラインホールド・ニーバーの思想と比較して、「責任的な現実策ではありません」と述べている（西谷「戦争と平和について」（上掲）99 頁）。
- (23) アントニイの引用した図書の題目は（*Царство Божие внутри вас есть*）であり、全集に収められたトルstoi の題目は *Царство Божие внутри вас* と、やや異なっている。また、アントニイが引用した言葉は、全集に収められたトルstoi の文章の中に見当たらない。
- (24) *Критика учения графа Льва Николаевича Толстого // Собрание сочинений. т. 1. М. 2007 г. С. 5-222.* なおこの反論は、1911 年のアントニイの論集にも採録され、また 2007 年の論集にも採録されている。
- (25) カイサリアのパシレイオス（330～379 頃）のロシア読み。
- (26) 第三回コンスタンティノープル公会（680～681 年）。
- (27) 記念柱のことを指していると思われる。記念柱の有名なものとしては、ローマのトラヤヌスの記念柱やマルクス・アウレリウスの記念柱があり、ペテルブルグにもアレクサンドルの円柱がある。
- (28) 曆に基づいた食事制限を中心とした生活に関する規則。日本正教会では、齋について「節制の時」、「自分自身を省み、より熱心に神に心を向け、祭を祝う準備をする」する期間と教えている（「たち一信仰生活」日本正教会ホームページ URL:<http://www.orthodoxjapan.jp/tebiki/>

---

[kokoroe02.html](#))。

- (29) 2011年3月の東北大震災後に被災地の仏教者とキリスト教者が共同で被災者の心のケアを行ってきたが、その後、この運動に東北大学に実践宗教学の寄付講座の開設が続き、2012年10月には、学術研究者と宗教者（仏教、キリスト教、イスラム教）の共同による「臨床宗教師研究プログラム」が実施されている。
- (30) Metropolitan Anthony (Khrapovitskiy), *The Christian Faith and War*, Holy Trinity Monastery, Jordanville, NY. 1988.
- (31) Сост. Петр Паламарчук. Анафема: История и XX век. М., 1998 г. С. 289-291.